

仙頭先生のこと

著者	千葉 典
雑誌名	神戸外大論叢
巻	63
号	1
ページ	1-4
発行年	2013-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001351/



仙頭先生のこと

千葉 典

I

最初に仙頭先生からお電話で御連絡をいただいたのは、小生が本学に着任する直前、2005年2月16日のことであった。なぜ8年近く前の出来事の日付までわかるかというと、小生の手許に1枚のメモが残されているからだ。そのおもな内容は、着任日が4月1日になること、学部での担当科目のこと、その講義概要を至急提出すること、2005年度は学部のゼミを担当しないでよいこと、大学院の資格審査は着任後になること、割愛申請のため学長が2月後半か3月に東京へいらっしゃること、などであった。

「何だか先方の御用件だけおっしゃって、よくわからなかった」というのが、お電話を受けた愚妻の弁だが、それは大学という職場の事情にまったく通じていない者のとらえ方であって、小生にとっては必要な情報がすべて含まれていた。（もっとも、前職は円満退職したので結局学長に割愛に来ていただく必要はなく、着任後は学部のゼミも大学院もいきなり担当することになるのだが。）ことほどさように、仙頭先生は決して饒舌ではなく、しかし必要なことを要領よく伝える方だなあ、というのが、小生の最初の印象である。それは先生の在職中、終始変わることはなかった。

II

初めてお会いした仙頭先生は、着任した小生を笑顔で迎えてくださった。「履歴書を拝見したときから、楽しみにしていました」と優しい言葉をかけていただき、そんなに期待していただいて申し訳ない、と思ったのは、小生の完全な早とちりであった。先生が着目されたのは研究業績ではなく、履歴書の「趣味 テニス」という欄だったのである。

先生は実にテニスがお好きで、硬式テニス部の顧問を務められたのみならず、御自身も教職員の方とテニスを楽しんでおられた。木曜の昼休み前になると、颯爽とした姿でテニスコートに向かう先生の姿を、毎週のようにお見受けしたものである。

一方小生はといえば、木曜の3限に講義を入れてしまったため、昼休みのテニスを先生と御一緒に楽しむ機会はいずれなかった。期待にお応えできなかった

たことが、今でも心残りとなっている。加えて、もし先生とテニスをする習慣が身についていれば、今日メタボリック・シンドロームに悩むこともなかっただろうに、と悔やまれるばかりである。

御退職されてからも、時には大学にいらして昔のようにテニスを楽しんでおられる…と噂に聞かすが、小生が実際に確かめたことはなく、真偽のほどは定かではない。

III

仙頭先生が御担当されていた「国際貿易論」「国際マクロ経済学」「開発経済学」は、経済学の体系では応用経済学に属する科目であり、標準的な教員にとって、いきなり初学者に教えるのはきわめて困難（と言うかほとんど無理）な内容と思われる。しかし先生の講義は、経済理論の素養が乏しい学生にも、丁寧にわかりやすく説明してくれると評判であった。それを可能にしたのは、数々の御業績からうかがえる豊富な学術的知識のみならず、現実的な国際経済の動向に対する強い関心と深い洞察にあったのではないかと小生は考えている。その傍証となるのは、先生の講義で配布されていた膨大なプリントである。小生が講義を終えて研究室に戻るとき、大講義室へ講義に向かわれる先生とすれ違うことがままあった。先生はいつも大量の新しいプリントを抱え、国際的な経済事象について最新の情報を学生に提供し、国際経済学的分析にもとづいて解説しておられたようである。

「ようである」というのは、実際に先生の講義を拝聴する機会には恵まれず、たまに先生の講義プリントを履修中の学生から見せてもらうのが関の山だったからだ。唯一お聞きすることができたのは、オープンキャンパスにおける模擬講義であったが、貿易の利益と関税等の措置による不利益とを、まことにわかりやすく、しかも短時間で図解しておられたのには、驚嘆を禁じ得なかった。

確かめたことはないが、他の先生の講義を見学させていただくことは、大学では「禁じ手」とされているのが不文律らしい。一度先生の講義を拝聴してノウハウを盗んでおけばよかった、と今さらながらに思うが、仮にその願いがかなったとしても、小生に先生の真似ができたかといえ、はなはだ疑問である。

IV

講義のみならず、仙頭先生はゼミにもたいへん熱心に取り組んでおられた。国際関係学科における経済分野の中核を担い、しかも講義がわかりやすくおもしろいとくれば、ゼミの人気の高いのも当然のことである。しかし、先生はゼミ生の人数ををおおむね1学年10名までに厳しく制限しておられた。学科会議

の折にうかがった話では、「研究室でゼミをするので、収容人数に限りがあるのですよ」という理由だったが、もちろん教育効果も考えてのことだったに違いない。

仙頭ゼミの活発さと楽しさは、それを羨む小生のゼミの学生からもしばしば漏れ聞こえてきたものである。いわく、ゼミの最中にお菓子のサービスがある、ゼミ合宿で温泉とスキー（スノーボードか？）に出かけた、などなど。いずれの噂も未確認だが、たまに先生の研究室へお邪魔すると、居心地の良さそうなソファと重厚なオーディオセットが迎えてくれて、「ああ、仙頭ゼミはこのように落ち着いた雰囲気の中かで進んでいくんだなあ」と、ゼミの様子を思い浮かべることができた。

そうした空気的一端に触れたのは、とある冬の日のことだった。夕刻になって、妙に賑やかに廊下を行き来する学生がいるので様子をうかがうと、笑いさんざめく学生たちが、切った野菜や鍋を手に、流しのある3階の給湯室と先生の研究室との間を行ったり来たりしている。おそらく研究室での鍋パーティーを準備していたのであろう。宴会大好き人間の小生にとって、ビールを片手に乱入したいのはやまやまであったが、仙頭ゼミの落ち着いた雰囲気がぶち壊しになるであろうことは火を見るより明らかだったので、自粛させていただいた。

V

国際関係学科では、数年前から「国際関係フォーラム」と称して、教員、職員、学生、どなたでも参加歓迎の研究会ないし勉強会のようなものを、有志が主宰している。仙頭先生の御退職を前にぜひお話を聞かせていただきたいと考え、スピーカーを引き受けていただくべく、「退職記念講義ということで、いっちょ派手にやりませんか」とお願いしたものの、「いやいや、とんでもない」と最初は固辞されてしまった。それなら少人数で、あまりPRもせず、さらに短時間で…という条件でようやく御承諾いただき、2012年1月25日の夕刻に御報告をしていただくことができた。

演題は「国際関係学科設立の頃」。学科の設立当時から在職する唯一の教員であった先生にふさわしく、楠が丘キャンパス時代の本学の様子、学園都市キャンパスへの移転の経緯、国際関係学科設立までの紆余曲折とその裏事情、果ては神戸市のニュータウン建設をめぐる背景に至るまで、「学科の生き字引」ならではの豊富な内容が開陳され、教員から学生までたいへん興味深く拝聴させていただいた。

先生は日頃あまりお酒を召し上がる方ではないので、報告の後は茶話会という形で会場を変えずに懇談へと移ったが、学生諸君との話は尽きることなく、

午後5時に始まったフォーラムは予定を大幅に超過して午後7時を回ってしまった。そこで、いったん中締めとして会場を駅前の居酒屋へと移したのだが、先生はそちらにもおつきあいくださり、結局8時過ぎまで御同席していただいた。酒席を好まれない先生がここまで御一緒してくださったことに、小生はいたく驚き、感激もしたのであるが、もちろん小生らと一杯というだけでは早々に御帰宅なさっているはずであり、決め手はやはり学生諸君の存在であったと考えざるを得ない。本学の学生と、本学に対する先生の愛情は、まことに深かったのだなあと、御退職の直前になって改めて感じ入った次第であった。

VI

仙頭先生の姿を大学でお見受けしなくなって半年が過ぎたが、何かが大きく変わったかといえば、一見しただけではそれとわかる所はないかのように感じられる。しかし、本学にいて「こういう時はどうすればよいのだろう」とちょっとした疑問が生じたとき、尋ねるべき人の不在にふと気づき、空いた穴の大きさを再認識するのである。まさに先生が国際関係学科の「生き字引」でいらした所以であろう。

先生が本学を去られて、設立当初から勤務する国際関係学科の教員は姿を消してしまった。私たちは、そのことをマイナスに捉えるのではなく、学科が次のステージに移行したと考えるべきなのであろう。設立から四半世紀が経過し、国際関係学科をめぐる環境も社会的ニーズも、当時から大きく変化している。本学に残った私たちには、今日的な国際関係学科のあり方を考え、構築していく姿勢が求められているのではないか。それは、とりもなおさず、学科の新設と発展に尽力されてきた、仙頭先生のお心にもかなうことのはずである。

仙頭先生、36年間の本学勤務、本当にありがとうございました。